赤ちゃんの四季（51）　平成25年秋

脳科学、認知心理学からみた早期教育の是非　その2

十分な養育を受けることができないと、赤ちゃんの発育は身体的、精神的に大きなダメージを被ります。ルーマニアの旧チャウシェスク政権時代の孤児院で、たいへん悍ましい環境のもとで、生後6週間から2〜3歳まで過ごした赤ちゃんのその後の発達ついての事実が明らかにされています。

ロンドン大学のマイケル・ルッター博士らは、このときルーマニアから英国へ養子として迎えた子どもたちと他から養子として迎えた子どもたちを比較し、十分な養育を受けずに育った赤ちゃんには、運動や言語の発達だけでなく、社会的、情緒的、認知的な発達がひどく阻害されているだけでなく、自閉的行動をとるものも見られたそうです。ところが、この研究の対象となった子どもたちのその後の発達をみると、知的能力の回復や、自閉的行動の改善には目覚ましいものがあったのです。この事実は、ひどく疎外を受けていた赤ちゃんでも矯正的な刺激とケアをきちんと施せば、ほとんど回復することから、矯正的なケアは決して遅すぎることはないことを示しています。

貧しい環境、脳への乏しい刺激は、脳の発達にとって絶対的に悪いことですが、だからといって過剰の刺激も、「過ぎたるは及ばざるが如し」というように、脳に悪い働きをもつかも知れないのです。子どもの脳の発達にとっては、子ども自身が日常生活の中で自然に学習できる「ごくふつうの、一般的な刺激」で十分と考えますが、今日のように各種情報メディアを介して身の回りに情報が氾濫している社会では、子どもにとって好ましくない情報をいかに断つかの方がもっと重要なことでしょう。